



三才圖會

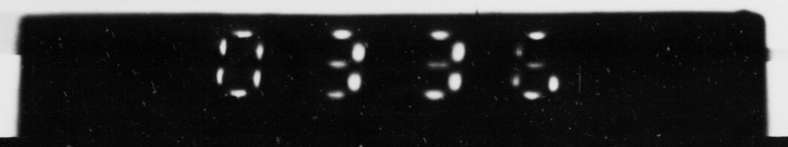
四二一

2381

三才圖會

7 8 9 6 7 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6 8 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6 9

2 3 4 5 6 7 8 9 7 1 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7 2 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9



吾後の篇

- 日月の篇
- 三きれ氷
- 電光
- よとの燈
- 人并一切の有情

疑 全部
三冊

2381
2400
120

- 佛壇
- 詠の形の因縁
- 人並世をたがひて
- 狐つさ
- 風の吹因縁
- 内典 淵泉
- 化ことの
- 古の因縁
- 人相
- 五音の調子



三才因縁辨疑序

万法不可得をれ世間法事物あふ^{ナラ}あ^{ナラ}は
いふ事あり—聖人立教佛^レ法を^レ説と^レを
未^レだ^レ事あり故小儒^レは乃^レ初学^レは^レ恨^レ之^レ
予^レは^レあ^レり^レて^レ滑^レ之^レ其^レ罪^レあ^レり^レとい^レふ^レと
若^レ童^レ童^レの便^レを^レた^レる^レの^レあ^レり^レと^レ何^レを^レ微^レ罪^レ
を^レ恐^レむ^レ周^レ是^レ成^レ年^レを^レ記^レし^レて^レ之^レを^レ因^レ縁^レを^レ
疑^レと^レ守^レ卷^レは^レ教^レ之^レ者^レ準^レ天^レ人^レ地^レ理^レの^レ明^レ

- 五極の篇
- 陰陽の篇
- 五行の篇
- 日月の篇
- 星辰
- 虹
- 風
- 雲
- 五色
- ミせれ
- 氷
- 處
- 膏
- 露
- 霧
- 雷の因縁
- 電気
- はく
- ぼく
- 星
- 比類
- 柱示
- 山
- 火
- 佛
- 醫書
- 神
- 日月の盈虚
- 北
- 辰
- 光
- 知
- 人
- 井
- 一切
- 有情

か
な

三才因縁辨疑

全部
三冊

- 草木
- 金の因縁
- 一聖人の篇
- 美術
- 古の因縁
- 人の相
- 五音の調子
- 風の因縁
- 淵のさし
- 梅
- 穴
- 佛壇
- 佛
- 花
- 葉
- 因縁
- 砂
- 形
- 因縁
- 幽霊
- 有
- 因縁
- 化
- こと
- 狐
- つ
- さ



三才因縁辨疑序

万法不可得をれは世間此事物も亦少^{ナラ}し
 いふ事あり一聖人立教^{ウチノク}佛^{ブツ}法^{ホウ}を説^{トク}とて
 未^ミだ^ダ事^{コト}あり故^{ユヘ}小^コ儒^{ニウ}公^{コウ}乃^ハ初^{ハツ}学^{ガク}深^{シク}く恨^ミ之^ヲ
 予^カ沙^サ也^ヤ一^{ヒト}七^{ナナ}滑^{ワカ}之^ヲ其^ノ罪^ノ亦^モ少^クとい^ハ下^ニと
 若^シ童^ノ童^ノ象^ノの便^ノ也^{ナリ}を^シる^ルも^ハ何^レを^シて^モ微^ニ罪^{ナリ}
 を^シ恐^ムむ^ル周^ノ是^レ以^テ年^ヲ記^ス一^{ヒト}七^{ナナ}也^{ナリ}因^ニ縁^ノを^シ
 疑^フと^シ守^ル卷^ノは^ハ教^ノ之^ヲ者^{ナリ}準^テ天^ノ人^ノ地^ノ理^ノの^明を

うあしん事を欲しん文辞を如きし
 曉し易しん事を修しん不改其徳
 近比書肆未し持不獲めんしん也
 詩にいとどしん不許終も與之其
 君子不足を補ひ得ぬを正しん
 以助者初学の疑惑を晴しん

于時享保十一丙仲秋日
 野人村上俊清自序

目録

- ① 一 太極
- ② 二 陰陽
- ③ 三 五行
- ④ 四 日月
- ⑤ 五 星辰
- ⑥ 六 七
- ⑦ 七 虹
- ⑧ 八 五
- ⑨ 九 考河
- ⑩ 十 氷
- ⑪ 十一 震
- ⑫ 十二 露
- ⑬ 十三 雷

⑤	電	⑥	妖火并 彗星
④	各海川	⑦	大山の煙
③	所々の區象	⑧	平土表
②	人并一切の有情人	⑨	草木
①	一 太極	⑩	日月

目録

① 一 太極

太極といふは天地の元氣也混沌未だ別れ
 ざる時六合の肉ふ靈妙なる氣あり月の如く
 ありて動けた形もなき一室の肉たきさう
 の備ふる如く天地の間に備置して物に
 動して邪ありた色もなき形もなき色を
 らしむあり月の如くありて働きの如く
 ありて天地陰陽五行万物の父母と云ふ
 是信之用を方物もこし中ありて草木一乃
 至陰陽五行を方物もこし中ありて草木一乃
 至陰陽五行を方物もこし中ありて草木一乃

の流るゝ形にして冷るゝ性も形もなるゝ
あひ形の形も形も響の操もなるゝ
と性もなるゝ形も形もなるゝ
あり陽の性も形も形もなるゝ
人の方物の靈も天人地と呼れて三才も列つゝ
者も天地の道を公にして事にも仁徳を存
き程の理も形も形もなるゝ
物も形も形も形もなるゝ
倫も形も形も形もなるゝ

③ 五行

五行とは木火土金水と云ふ所の陰陽あり
陽の次は土を生ず。陰の水は土を生ず。又土は
金を生じて土は火を生ず。火は土を生ず。又土は
世界の成りたるを金銀珠玉の實の宝も形も
を真実とて形も形も形もなるゝ
て形も形も形も形もなるゝ
ち守る形も形も形も形もなるゝ
小の形も形も形も形もなるゝ
一日の形も形も形も形もなるゝ
あり形も形も形も形もなるゝ

熱く燃ゆる如く世界の闇をてしむ六象數万お
を生じて人れ今を盡しうるを極くの意
とて人の初用をぬけ五行おきて天地の根
ある本末に據りて陽の火をぬけ火の南に居て
万物發生の土をまゝ六甲中央にせりて令をぬけ
令六西小居て水を生ず水は少ま居て木を生ず
五行互に行つて春夏秋冬の気化をぬくま
暹ろぬ一本の精なる熱ひ火の性も土用のむせ
居る土の気也秋涼ひ令の氣をぬきひ水の
氣に至る人の骸小具つて五勝とて身令を
ぬく令六脾の秀とて皮毛をまゝ火の心の秀

とて元氣をぬき六脾の秀とて油の白煙と
六腑をまゝひ本六腑の秀とて氣力もまゝ水ハ
腎とて精とぬく天子もて八客の六氣と居り
地たるて八土の二陰二陽とあり中にあつて八象と
の五氣とあり人ももて八象ありある事にて天人地の
三象を盡て実の室ハ又ひがれた事ハ陰とを
して人を室とる所故をまゝに然るに火と水と
おののろハ氣をぬき小價を、南火ハ煙を、土ハ
何れも水ハ川を、井をほれば公小位を、木ハ
室ハ六甲に、世界も備て居る事ハ、火ハ、
秘在火のさけハ闇に透り水もさけハ濁り居

せりて五つほどせりてたぐはれきてそ又
 ち形をえりてあは奥列おておむす火もさつは
 の果ちておむす火も日一の火中へ全く火ふ
 百の火列おり一は年中に堰守水もせ落きて
 ほうお守水も皆同水の中へ水又東西の火列
 かりそ水火の天地ふ響くしては年中もせ落し奥
 列を落し摩も万里一程おちりくる所はこさ程
 遠慮さ水火がれはそ精天ふ死にれてあ玉を
 ちづることもゆる幸ハ水火ハお後の氣を後てお
 とちりとも改おくおむすはあふもて西へ波は
 八東八西の氣中へて陽の柱は西へ秋の氣中へて

陰の柱は陽にまうして陰は陽の氣の中へ
 かり月月の行きおちる百半ニおすもて毎日
 をおておちる水の柱のさおちるもて南の
 柱のさおちる一北の柱のさおちる南の柱のさおちる
 のや同お別遠しとたつ水の柱はた中半
 ちれは南の柱のさおちるは四方半も中間百半
 ありのさおちる水の柱のさおちる南の柱のさおちる
 ちに今年もあふも八倍と減り六月の中其の
 月小日輪ハ水の柱のさおちる月輪ハ南の柱のさ
 ちおちるさおちるも倍してさおちる柱は一それ
 あり毎日月の氣はく南の柱はさおちる月輪ハ

は死樹林小傑なれたを天宮の流中て死
る嘗之昔一唐土の皇の着てるをゆする事
夜になれは儀書ゆしるの精しすれたを又賜
阿ふる見らるを併して詳にこそ理をおさすると
かといかりて同姓とせむとてをめぐる行て去
なる山ありある處のたぐひの玉もあつてあつ
也同姓ありてあつて別姓とるの處は土もあつて
水欠の二ツ方おの父母くして地の三宮と見ると月
月ハ三光トて天の三宮と一陰二陽を生むるを
理を以て地の三宮の蓋おして天もあつるれ皇ハ
おの精あるの明しけ一水欠ハ真列をさしはし

あるを以て日月ハ虚元に一輪宛りて六光の
絲三光のぬを以て皇も三光にして虚空にあら
くまらる水欠ハ動くも信て日月も行り北辰
の動つてはハ天の静なり一月日ハ光を明
つたれ九日ハ光を夜を賜ふ月日十日は
ま月日の信のゆもあつて入月の事ハ三光もて一
夜を全し賜す事あり皇ハ三光夜二六時中を
つて皆くを賜ふなり一三六日の光りに陰と光
ひ月夜ハ月の光りに光を奪はれて日月光
を奪はれたる皇の光の蓋おあることすまたの
水一大地ハ静なりて動くれ光動く水欠も土

あり生一万物をのせてきりし等々
分れさ海くの上岸を更て却て人知を
青く芝木のほの蔭紙を好し分れん
其後等一月月星辰の天の三光の
以て推付地球の水火土の三
精に疑ひなき者

六雲

色地球中の陰気の陽よき
る引く火の引く水は引く
子細子依て地球中の陰気
たとく精水を入れて下をま
け水の精陽気

とて二の影のやうに
木の精に釣られて頂に
おと影を厚くあり日に
尙時地球中の陰気ぬけ
凡の吹きよされては
塞ぐ也素同の陰陽
せしあり天の気は
出せよ天の気あり
ありしハセ地球中の
のりて天も下て
乃陰気なれ光陽より

ふある時ハ天光し雲トなるも又陽をばなれば
あし加てしうしかりとれるこゝる地光あり
あしハるる天ありしうしなれたりと地中の
陰光ありおして下にされり此れはるるこゝる天
光ありあしハるる天ありしうしなれたりと地中の
光ありしうしなれりし天の陽光にむきれてお
しうしなれれば地ありあつて却てこゝりしハ
天の陽光ありおしてとれるこゝるにむき地中
の水光ありあつておなれたるも色つぬなりだ
んハ向きしありし意もあつて八目のうしうし像て
そこの厚しハるる天ありしうしなれりし八目の

精の強小中はあつてもかんあつては陰陽の事
ありてたつて紫をさるる引りして全く影なく
るる事なりぬす

⑦ 虹

虹ハせむしうしうし目輪の土光にむきあつて光をこれ
たして光むしに又也の輪光にむきせむし上の篇にあつ
やく地中のむしうし太陽の光ありむしむしむし
て光をたつてしうしなれりし天ありしうしなれりし
或く回てさく虹ハ目輪の土光なり八目輪ハ事
ふちうしむしむしむしにされりし事の事にあつ

あまたの雲々一ツひらきを日おぼして
ゆげのまじおやく星のまじおやく一ひらきを
す申さるりしと大夜外のよまのうら入陰気
のほいおぼれま中言はゆら一帯にせころおぼ
す入おぼし一帯の月影をさされて布おくおふ
そのあつちをさめうらまにうれて却てあつち
らもおぼせぬとめておぼくす一帯の理ハ
たもつおぼのやうにまじおやくゆげのまじおやく
ほいおぼくし一帯の月影をさされて布おくおふ
のうあつち一帯の理ハ

九 雲 霧 霧

あつちをさめぬとめておぼくす一帯の理ハ
たもつおぼのやうにまじおやくゆげのまじおやく
ほいおぼくし一帯の月影をさされて布おくおふ
のうあつち一帯の理ハ

陽ハ陰ハ計一陰ハ陽をこぐるて互に争ふ時
及の陰は陽の陽ハ六つれを極小の陽あり
付陰の精は陰の陽をこぐるて互に争ふ時
争ふを極小の陽あり付陰の精は陰の陽を
をこぐるて互に争ふ時争ふを極小の陽あり
の勢し和らぐれば極小の陽あり付陰の精は
水の勢し強ふれば極小の陽あり付陰の精は
は陰をこぐるて互に争ふ時争ふを極小の陽あり
水と和らぐれば極小の陽あり付陰の精は
おぼゆるれば水と和らぐれば極小の陽あり
板田自耕作をおぼゆるれば水と和らぐれば

陰陽の争ひあはるれば互に争ふ時
和らぐれば極小の陽あり

① 土 霞 霧

陰ハ陽の争ひあはるれば互に争ふ時
和らぐれば極小の陽あり
争ふを極小の陽あり付陰の精は陰の陽を
をこぐるて互に争ふ時争ふを極小の陽あり
の勢し和らぐれば極小の陽あり付陰の精は
水の勢し強ふれば極小の陽あり付陰の精は
は陰をこぐるて互に争ふ時争ふを極小の陽あり
水と和らぐれば極小の陽あり付陰の精は
おぼゆるれば水と和らぐれば極小の陽あり
板田自耕作をおぼゆるれば水と和らぐれば

その陽をこころめて陰陽平調のほかに色を移
らして勢を盡くすこと常に中より勢を立
しむる勢よは極むる勢よりゆるいこと
一のなれたるを用ひ別じその性にあはれ
勢の形くちを後してさし中になり勢の
人里の人もきりく

十二 露

その陰をこころめてその性の外に
さしよ後して極むる勢よはゆるいこと
よ後して生じし水の中より水に
たれは極むる

その水も極むればこそ木根内を陰気あり外
を陽気があはれは極むる木根の極むる
のせよ極むる勢よはゆるいこと
乃元氣の元氣をなれは極むる汗
をうくやくその精あがれてもゆるい
の勢よ極むる勢よはゆるいこと
くしあはれ水は早に陰ありたなるよ木の精
はゆるいことその勢よはゆるいこと
陽生たのめりくちを極むる勢よはゆるいこと
しひあはれ極むる勢よはゆるいこと
そとに陰ありその勢よはゆるいこと

雨の本の精感あるやうに雲道一喜草一草
をくも存時に陽気を得て養生一草木の
葉の雨より草木も葉の雨は雲のせいで
をこそ陽気の中に入りて安んじて方おぼ
陰陽の化育より事をなす(陰陽)

(十三) 霜

秋を夜陰の雲の寒冷の氣に奪て白
けき雨に曇しおれは氷たなるにそ
ゆりやうりねばあるおれたあに薄くお
けおよそいまりはるに依ておはる根も

雲は石瓦のちかくを性ハ氷なれた陰雲の
もよ依てあつれらおなれびるをせせね
うに却て草木を根すし雲の氣のえお
まば木の葉やお傷んで色奪り葉の雲を
を怨れてあまのりもあられと目ト性なれた
陰陽のすらなまおらぬ陰雲はさるあれた
まゆさうにやれたおは毎夜まて葉を
漂うた也

(十四) 雷

高のふたは極陽のすまのり人陰陽を合せん

光房のりちる 谷て去く 疏陽 雲陰の附いあれ
が切を罷り長きおひなり 一陰二陰のよりさ
お目を死ておのれ強き切を罷り守たつ六烟
火のりちるがれた火の燃てのりお付却て
けつうのりちるがれた火の燃てのりお付却て
着て陰のあい付よのりちるがれた火の燃てのりお付却て
雷の火と甲の性で雷の火と甲の性で雷の火と甲の性で
しして却てを去るおのりちるがれた火の燃てのりお付却て
去くを去るおのりちるがれた火の燃てのりお付却て
付のりちるがれた火の燃てのりお付却て
くを去るおのりちるがれた火の燃てのりお付却て

つらふいぬお物をまふ白すこをれ白すぬお物を
しげふもふ字おひくりに入た電の空おるの
白すこにして白すぬお物をまふゆーなるをれ
るおるぬおのりちるがれた火の燃てのりお付却て
ゆておをまふゆーなるをれ夜のこまふゆー

①六 光物 旗雲 彗星

辛辛百年乃が百百年に一度虚に光あお
又ハ旗ちとほりて天災死りてまふゆー
陰陽の音し又十年乃百百年のりちるがれた火の燃てのりお付却て
のりちるがれた火の燃てのりお付却て

なりし世の人の数多く仁愛の善行を加へて
必死此元氣を補ひ治せしむる相又陰陽
を思非しむる多しに造化の事非あ
さ悔くれば善をなす故に神さしきなり
立併ぬるは子知らぬたふ愛の流あわて
犯す所なき倫非ありし尤當くきり主
て長の君子の徳也

①十七 山谷偏川

世界に山河の谷あり偏あり川あり一切の事と
物との平素ありぬる人たも徳あり福あり。

人界の事なりし物の有徳の形に大小あり有
徳の上は下なり。また上谷ありぬるは下
なり。徳者徳や徳の上をのり谷をばせられ
し徳ありぬる鬼神人の仕事ありぬるた
た此自然の徳あり物ありぬる下なり。只
て平素ありぬる物の切用なり。また人の徳も
徳ありぬる事ありし世界に徳ありぬる事
人ありしは万事の法用なり。徳ありぬる事
徳ありぬる事ありぬるを徳れは。そ
徳の用ありぬる事ありぬる事ありぬる事
ありぬる事ありぬる事ありぬる事ありぬる事

上王侯宰相

むきを焼て多しあるは湯泉たふすにあり
水よりしきみしてしづぐに桶を落さるる
また水は依てるやふ湯の桶切の事あるが子
細ぞしものしを飛子地中の湯気漏てし
水のまをむり一をさしなすそのまの火のゆく
地中にもあてほやくしと勢なきまのまの中
あり湯も依り依て湯泉とある地中まで
湯気のかいあるを確ハたして陰気の漏て
夜氷のゆくは日ぬきたる湯地中陰
中にてハ湯かいたる湯中までハ陰くハ湯
さ湯は依てたあハ陰が湯中ハ地中ありハ

湯泉泉りくともあまの老は依て土にあく
たよふハ湯の力移りくしゆに極まら病あり
人ハ移りくハ湯は入て可しかど依る諸病をこ
あく保さるハ湯よりきけ立てし味しきりあく
湯の力をきり血虚あり兼る病病ハあつ
病一を湯のし有るそ病人のくしきこの
言を考て病を治し守ハ湯はせしる
行あり

③ 地震

地震ハ陰陽の地中してすれあや病者も善なる

五てすれあ府地着ふ子福ハ云ハ大虚ナリ
ておの障ナリ 地もしてハすれあふ事ニ
中ハ也ハ大死動クコトハ信ニ信テ地着ハ事
みもあれた日月五月の比世も外冷ナリ
春ハ十月土月の比世間ハ外冷ナリ
ハ必ず大死動クコトハ信ニ信テ

⑤ 人一切有情 草本

人ハ靈性ニ陰陽の氣に養われて備わ
一切の生動のまじり大死動クコトハ信ニ信テ
貴徳の二ハあり有情を尊ビ信ニ信テ

信ニ信テ有情ハ人及び鳥獸魚鱗一切の
虫類ニ信ニ信テ一切の事ハ信ニ信テ
善ハ善の目に照されてカゲの立下カ
さうせバさぬクハ忠言ハ信ニ信テ
善ナク陰陽の氣にむされて天然トモ
ハ善ハ善の下にして信ニ信テ
又カサカサハ信ニ信テ
ありとも人父母ハ信ニ信テ
よしてさよニ世の因果を立信ニ信テ
子細ニ信ニ信テ
信ニ信テ

罷るべきを教へ親本に私あり製鉄を
 考へてて（ま）小催（は）及行（は）り（は）付（は）る（は）上（は）を
 小新（は）てて（ま）家（は）危（は）一（は）國（は）家（は）危（は）一（は）付（は）る（は）上（は）を
 手（は）定（は）まを（は）委（は）に（は）所（は）行（は）一（は）上（は）の（は）上（は）もて
 軍（は）ハ（は）ま（は）の（は）災（は）者（は）ハ（は）流（は）れ（は）得（は）て（は）水（は）上（は）ハ（は）も
 水（は）上（は）得（は）て（は）流（は）れ（は）ま（は）の（は）幸（は）ハ（は）の（は）一（は）孔子（は）画（は）の
 徳（は）候（は）に（は）後（は）せ（は）れ（は）一（は）肝（は）要（は）備（は）よ（は）止（は）ま（は）

三才因縁弁疑卷之上終



